

# 「International Joint Program on Infrastructure Planning and Economic Development under Economic Integration in the Philippines 参加報告書」

京都大学大学院 経営管理教育部 研究科 2年  
梅田 孝博

## ① 学習成果

本研修では、途上国の国際開発の現場で行われる仕事の主要な流れを再認識することができた。私は本学入学前に西アフリカの日本大使館で開発援助の仕事に従事していたが、本学入学後は経済学や統計学の知見を深めるために学問に勤しみ、その間、致し方のないことでもあるが仕事ベースだけでなく生活ベースでも英語や仏語など多言語での会話の機会が減ってしまい在勤中に培われた語学力は大幅に失われてしまっていた。本研修ではコミュニケーションは全て英語で行われ、自らの知りたいことや興味のある研究分野について相手に尋ねる際、英語ベースで細かなニュアンスを伝えなければ話が先に進まないという切迫感がしばしば蘇った。この経験が私にとって最も重要な感覚であった。国際開発の現場では、自らの専門性を発揮することと同様に、本研修で行われたような会議や関係者とのコミュニケーションの機会が圧倒的に多く、重要である。本研修を機に、今後語学の勉強に益々重点を置いていきたいと強く感じるようになった。

## ② 海外での経験

フィリピンにおける生活面の経験について、首都マニラにおいては概ね日本と変わらない生活を送れると感じた。宿泊先はマニラの中心地であり、徒歩圏内にコンビニエンスストアや薬局、レストラン、衣服店、そしてそうした商業施設を全て内包したショッピングモールが存在したので、物質的な困難は感じなかった。治安の面でも事前に知らされているほどの脅威は感じず、防犯をきちんと意識していれば犯罪に巻き込まれるリスクは低いと思えた。それでも、スリなどの軽犯罪は現地人も常に警戒していることから最低限の緊張感には常に必要であると思う。本プログラムの後、同国におけるインターンシッププログラムにおいてダバオに向かった。ダバオの環境には、首都マニラとの明らかな差を感じた。建物や道路、交通機関や商店など表層的には私の生活した西アフリカブルキナファソの首都ワガドゥグに並ぶ水準であった。ダバオはキリスト教国家であるフィリピンにおいて数少ないムスリムの地域でもあり、軽犯罪だけでなく大きな事件が起こるリスクも想定しながら行動しなければならない程度の危機感には常に感じていた。だが、フィリピンの人々は概ね親日的かつ親切であることから相手国そして他者への敬意を保ちながら接することができれば基本的には安全と思われる。

## ③ プログラム内容

フィリピン国内の経済開発課題について、各分野の有識者による講義を中心とした参加型プログラムであった。講義だけでなく計量経済分析のモデル構築を実践で学ぶ機会やグループディスカッションの機会も設けられており内容は概ね充実していたと感じる。プログラム名のとおり、基本は交通インフラに軸を据えた内容が多かったが、日本で想像するようなインフラとは異なり教育や金融へのアクセシビリティといった課題もインフラの言葉の定義としては内包しており、東南アジアでも急成長を遂げたフィリピンにおいてインフラの課題は現在も山積していることをプログラムを通じて実感することができた。経済開発は個人や特定の政府機関だけの仕事ではなく、海外参入を考えている日本企業や現地に住むフィリピン人までを含む複雑な関係性を持った仕事でもある。それぞれの機関において、経済開発のどの分野に注力しているのか、そして他のステークホルダーたちとどのように連携しているのかを知ることができたことが、本プログラムの何よりの成果であったと思う。

## ③ 進路への影響について

将来、開発分野での仕事に従事する希望を持つ私にとっては今回のプログラムは有意義であった。私自身の勤務経験から、複数の機関と人々を含んだイベントを時刻通り、かつ予定通り進めることは非常に難しい。参加者に負担を掛けぬように特にロジ面では常にトラブルシューティングを想定し不測の事態を鑑みたプランニングが求

められる。本プログラムでは、スケジュール上予定されていた全てのイベントが結果的には滞りなく進行し、統括者の本学教授陣と相手国関係者らの対応力の広さ及びお互いの親密さを知ることができた。私自身としては、本プログラムを通じて、途上国で仕事をするために重要なコミュニケーション能力や状況適応力を養うことを再認識し、今後そのためにどのような準備するべきかという課題に取り組まなければならないと感じた。とりわけ痛感したのは語学力と対人折衝能力である。現在、本学で身につけられている専門知識を深めつつ、今後、国際協力の舞台で様々な関係者との繋がりを広めていくために自己研鑽していきたい。